

俳句

大津俳句会

昼の月揚げりしほかは大焼野

井芹眞一郎

どこからか母の声して母子草

秋山 恵子

窓開けて仏間に通す木の芽風

市原 初女

舞踏家の天寿の訃音春の月

江藤 みち

庭めぐりつらつら椿ほめにけり

大塚喜久子

窓越しに五岳と対峙忘れ雪

坂本 セキ

泡沫のところどころに春の川

佐賀 久子

大阿蘇の末黒野空へ続きたる

堀川 妙子

春雷や阿蘇の五岳を股にかけ

松尾 昭雅

恙なく花に集まる句友どち

武藤 規子

糸柳もつれさうでももつれどる

渡邊佳代子

つちふるや大樹は影をひそめたる

森山美穂子

俳句

つのはな句会

夕陽掌にのせ二月の不知火海まで

星永 文夫

椿落つ少女に届かぬ菩薩の手

志賀 孝子

三月は耳のかたち蛇行して

田上 公代

声高の語尾に訛りの春の駅

木庭 杏子

飢えを知る少女を包む春の闇

上杉 道子

春一番ざわざわ騒ぐ腹の虫

矢嶋 道子

スニーカーも長靴もいる植木市

水野 春子

沈丁花風にのり祖母の村まで

梅木トキエ

手をつなぎ父と歩いた植木市

塚本 洋子

部屋ごとかげろうを飼う午後三時

榮田しのぶ

短歌

大津短歌会

降りしきる雪を伴い蠟梅の

黄は豊かなり濡れつつ香る

吉永 恵子

しみじみと古き家を偲ばるる

無事に移りし新居に在りて

豊岡ミツル

ゆるゆるとふくらみふくらみぽつと落つ

蛇口の水の堪忍袋

渡辺佐代子

亡母思ふ慎しき女性姿こそ

座りたこあり吾には無しや

管野 静

昔日を思いめぐらし仰ぎ見る

古木に梅花かがやき咲くを

小平 善行

短歌

万年青短歌会

初詣で帰りに拾いし銀杏葉は

小判の色に似て嬉しかり

中山 春代

飛行機雲見上げし一瞬つまづきて

倒れし吾れに怪我なく安堵

磯崎テル子

震災をのがれて三年所在なき

友と出会いぬ立野病院

山内 信子

ほとばしる滝の如しと木戸に入る

庭の枝垂れの梅咲き盛り

合志 桃花

暮れなづむ庭の片辺に蠟梅の

朧おぼろに花明かりする

合志 妙子

紅梅は今を盛りと匂いたつ

通院の道に枝をかざして

河北 幸一